

リンゴクビレアブラムシの生態と防除対策

研究のねらい

リンゴクビレアブラムシはリンゴの開花期間中に加害するもので、1992年ころから目立つようになった。そこで本種の生態を紹介し、マメコバチに影響のない防除法を普及に移す。

研究の成果

本種の発生増加の原因として、リンゴハダニを対象としたマシン油乳剤の使用濃度の変更、芽出し10日後に使用する殺虫剤に対する感受性の変化や開花期間中の殺虫剤の種類の変遷が考えられた。本種はリンゴ樹上の芽の基部などに産み付けられた卵で越冬し、展葉期ころにふ化する。密度が高いと開花期ころに花そう基部に密集し、5月中旬ころから葉を大きく巻き込むような縮葉を引き起こす。このころから羽のある個体が出現し、次々と夏寄主（草本類）に移るため、6月以降になるとリンゴ樹上からいなくなる。秋期に再びリンゴ樹に飛来し、越冬卵を産み付ける。

本種は高密度にならないければ実害はないので、普通は防除を必要としない。発生が極端に多い場合は、マメコバチに対する影響の少ないピリマー水和剤2,000倍を使用する。6月以降はリンゴ樹上からいなくなるので、本種に対する落花期以降の防除は必要ない。キルバー液剤2,000倍、スプラサイド水和剤1,500倍、アドマイヤー水和剤2,000倍も本種に対して有効であるが、マメコバチに強い影響がある。硫酸ニコチン液剤1,000倍は、本種に対して効果が低い。



つぼみに密集した状態



寄生による新しょうの縮葉

主要な試験データ

第1表 リンゴクビレアブラムシの薬剤感受性（1994）

薬 剤 名	散布前の1花そ う当たり虫数	散布前を100としたときの虫数		
		3日後	7日後	14日後
ピリマー水和剤2,000倍	52.6	0	0	0
キルバー液剤2,000倍	52.8	0	0	0
スプラサイド水和剤1,500倍	41.0	0.005	0	0
アドマイヤー水和剤2,000倍	38.2	0	0	0
無 散 布	57.2	107.9	56.6	16.8

1994年5月10日散布、展着剤新リノー5,000倍加用、1区5花そう調査

第2表 リンゴクビレアブラムシの薬剤感受性 (1990)

薬 剤 名	散布前の1花そ う当たり虫数	散布前を100としたときの虫数		
		3日後	7日後	14日後
硫酸ニコチン液剤1,000倍	77.7	44.1	21.9	10.7
キルバール液剤2,000倍	77.0	18.9	0	0
スプラサイド水和剤1,500倍	77.0	10.3	0	0
無 散 布	65.7	103.5	96.3	37.6

1990年5月16日散布、展着剤新リノー5,000倍加用、1区3花そう調査

第3表 マメコバチ成虫に対する影響 (1992)

薬 剤 名	供試虫数	生 虫 数			
		3時間後	1日後	2日後	4日後
ピリマー水和剤2,000倍	30	30	30	29	25
キルバール液剤2,000倍	30	30	24	8	0
スプラサイド水和剤1,500倍	30	1	0	0	0
展 着 剤 の み	30	30	29	28	28

1992年5月12日薬液噴霧処理、展着剤新リノー5,000倍加用、1区10個体3反復

第4表 マメコバチ成虫に対する影響 (1994)

薬 剤 名	供試虫数	生 虫 数		
		3時間後	1日後	2日後
アドマイヤー水和剤2,000倍	30	0	0	0
ダーズバン水和剤1,000倍	30	0	0	0
展 着 剤 の み	30	30	30	30

1994年5月10日薬液噴霧処理、展着剤新リノー5,000倍加用、1区10個体3反復

発表資料

1. 川嶋浩三 (1987). 青森県津軽地方におけるリンゴを寄主とするアブラムシ類. 東北昆虫 25: 4-6.
2. 川嶋浩三 (1995). リンゴクビレアブラムシの生態とマメコバチに影響の少ない防除対策. リンゴ技術 47: 21-22.
3. りんご試病虫肥料部・畑作園試病虫肥料部 (1995). りんごの害虫リンゴクビレアブラムシの生態と防除対策. 平成7年度指導奨励事項・指導参考資料: 30-31.